

平成 29 年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「共同研究班」 研究報告書

平成 30 年 3 月 29 日現在

研究課題名	スラブ・ユーラシアにおける言語接触・言語圏に関する共同研究		
担当者	氏名	所属機関・職	
	野町 素己	北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・教授	
班員	氏名	所属機関・職	専門とする研究分野
	ヨフコバ 四位 エレオノラ	富山大学・大学院医学 薬学研究部・教授	ブルガリア語学・日本語学
	研究テーマ		
	現代ブルガリア文語における冠詞の使用に見られる変化		

研究成果の概要

1. ブルガリア語文法の特徴の一つには冠詞がある。スラヴ語の中では、冠詞はブルガリア語とマケドニア語にしか発達しておらず、バルカンの言語圏の特徴（バルカニズム）とも考えられるが、独自の起源を持つ現象との指摘もある。ブルガリア文語における冠詞の使用は、規範文法によって定められており、男性名詞においては、統語的な役割（主格または非主格）によって冠詞の長形と短形が使い分けられている。一方、口語および方言ではそういった使い分けはなされておらず、長形か短形かのどちらかの一方だけの使用または双方の混合使用が許容されている。近年、社会の変化に伴い、ブルガリア語も変化しつつある。また、ソーシャルメディアの急速な普及に伴い、文語の口語化が進んでいる。その結果、文語における冠詞の使用にも、規範からの逸脱が多く見られるようになった。本研究では、文語に見られる冠詞の使用の乱れという問題に焦点を絞り、以下のような課題に取り組んだ：

①ソーシャルメディアやメディア言語（主にオンライン新聞）の文章に見られる冠詞の規範からの逸脱について調べた。

②2017年7月にスラブ・ユーラシア研究センターを訪問し、本研究課題に関する資料を収集した。

③2017年9月にブルガリア語研究所を訪問し、現地調査を行った。

④考察にあたって、共時的な状況にとどまらず、現代ブルガリア文語に見られる冠詞の使用の乱れの背後には、歴史的な要因の有無の判明にも努めた。

なお、本研究の成果を2017年度日本スラヴ学研究会研究発表会において発表した。

上記研究に加え、オーストリアのブルゲンラント地方で話されるクロアチア方言における不定冠詞の用法に関し、ドイツ語の影響とその文法変化という点から現地調査を行った。

また2017年度の日本スラヴ学研究会にて、招聘したヤスミナ・グルコヴィッチ・メイジャー教

研究成果の概要（続き）

授（ノヴィサド大学）およびソフィヤ・ミロラドヴィッチ教授（セルビア学士院附属セルビア語研究所）と意見交換し、本研究成果を踏まえたうえで、南スラヴ諸語における言語接触と言語変化に関する共同研究への発展を目指すことにした。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。

学会発表

ヨフコバ四位エレオノラ、「メディア言語から観たブルガリア語の変化」、日本スラヴ学研究会、（於東京大学）、2018年3月29日。（謝辞なし）

Motoki Nomachi, “Placing Kashubian in the Circum-Baltic (CB) area and beyond,” ASEEEES at Chicago Marriott Downtown Magnificent Mile, USA, 10/11/2017.（謝辞なし）

Motoki Nomachi, “Evolution of the Kashubian indefinite marker *jeden* ‘one’ (compared to other High-Contact Slavic languages), Fitzwilliam College – Churchill College, University of Cambridge, UK 15/4/2018 (accepted).（謝辞なし）

当該研究活動を基に応募中の研究プロジェクト（科研費等）

なし。

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。